2023 年 2 月 5 日

日本ロシア文学会
会長　中村 唯史 様

企画代表
五月女 颯

日本ロシア文学会 若手ワークショップ企画
「ロシア・東欧の『パストラル』の諸相」
実施報告書

若手ワークショップ企画の実施について、下記の通り報告いたします。

1　日時　　2022 年 12 月 17 日（土）13 時 － 18 時 30 分
2　場所　　京都大学文学部校舎第３講義室／オンライン併用
3　プログラム

第 1 部：ロシアの「パストラル」
菅原 彩（早稲田大学大学院・博士後期課程）
「祝賀頌詩における牧歌的要素」
山下 大吾（京都大学・非常勤講師）
「A. マイコフ作『魚釣り』における古典牧歌的要素」
斎須 直人（名古屋外国語大学・講師）
「ドストエフスキー作品における黄金時代の夢とシラー的牧歌」
井伊裕子（東京外国語大学大学院・博士後期課程）
「移動派絵画における農村とパストラル」

第 2 部：東欧・日本の「パストラル」
五月女 颯（日本学術振興会・特別研究員）
「ジョージア文学の『パストラル』」
須藤 輝彦（日本学術振興会・特別研究員）
「不可能としての牧歌
——ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』を中心に」
伊東 弘樹（早稲田大学大学院・博士後期課程）
「日本近代における「パストラル」について
——佐藤春夫『田園の憂鬱』を題材に」

第 3 部：全体討議

コメンテーター

小椋 彩（北海道大学・助教）　【アドヴァイザー】

中村 唯史（京都大学・教授）

なお、各発表の要旨ならびに討議の内容については別添の資料を参照のこと。

4　運営

4.1　発表準備

各発表者とアドヴァイザーは、顔合わせや企画趣旨の確認等の目的で、7 月上旬にオンラインで 1 時間半程度の打ち合わせを行なった。

また、発表者は 11 月末までに発表原稿を一度提出し、発表内容の事前の共有を図った。

4.2　事前登録

対面での参加者数の把握（感染症対策のため）ならびに資料の事前配布を行う都合上、対面・オンラインともに事前登録制とし、オンラインについては Zoom を使用した。Google Forms 上の参加登録フォームからまず対面・オンラインともに登録してもらい、その後オンラインでの参加者には登録フォーム上に指示される URL から Zoom での参加登録もしてもらったが、Google Forms 上で最後に送信を押下していないオンライン参加者が複数あり、全体の参加者把握には Google Forms と Zoom の双方をつき合わせる必要が生じたことは反省点である。

4.3　当日の設営・運営

会場に備え付けのオンライン配信設備を用い、音声ならびに資料の共有を行なった。また発表者の映像については、カメラ機材（個人所有）を用い、別のパソコンから同時配信した。

また、京都大学院生・田村太さんに、ポスター掲示等のワークショップ運営に係る庶務について協力を得た。謝金は、企画代表・五月女の特別研究員奨励費より支出した。

5　参加登録人数

対面	18 名
オンライン	67 名

6　当日の様子

7　ポスター

8　共催　　京都大学 文学研究科

科研費 基礎研究(B) 「ロシア・中東欧のエコクリティシズム」(21H00518)

9　会計　　別紙「会計報告書」参照

以上

ワークショップ
「ロシア・東欧における『パストラル』の諸相」

報告者
企画代表　五月女 颯

1. 企画趣旨

そのタイトルが示す通り、本企画は、ロシア・東欧（本当は「中東欧」とすべきだった）の「パストラル」の諸相を概観するものである。

「パストラル」”pastoral” とは、いわゆる牧歌のことである。そもそもテオクリトスやウェルギリウスの『牧歌』など、西洋古典に端を発する文学ジャンルであった。そこでは牧夫（牛飼い、山羊飼い、羊飼い）の恋愛や仕事についてや、また彼らの詩比べなどが描かれる。また、理想郷・アルカディアのイメージもそこには付随し、人間と自然の調和の取れた世界への憧憬と、都市の生活では失われた世界への懐古、という 2 つの軸が見られる。

そうした「パストラル」表象であるが、中世のルネッサンス期には形式（モード）化する、とイギリスの文学研究者テリー・ギフォードは指摘する。例として、ギフォードはシェイクスピア『お気に召すまま』や『冬物語』を挙げている。前者では、追放されたロザリンドはアーデンの森へ向かい羊飼いに変装し、そして追放前の恋人オーランドと恋愛談義ののちに再び結ばれる。また後者では、シチリア王リオンディーズによって捨てられた娘パーディタは羊飼いによって拾われたあと、最終的にボヘミア王子と結ばれ父のシチリアへ帰還を果たす。いずれの物語でも、権力争いにまみれた宮廷から牧歌的空間に逃避し、そしてそこからで力を蓄えて元の場所へと帰還するという、「逃避と帰還」 “Retreat and Return” の様式が見られるとギフォードは指摘する。

他方、そのようなパストラル表象で無視されているのが、農業での労働や階級差に基づく収奪といった、農村での厳しい現実である。そうした現実を（リアリスティックに）描く作品を、ギフォードは「アンチ・パストラル」と呼んでおり、Oliver Goldsmith や George Crabbe といった作家を例として挙げている。

環境保護／破壊、または自然や環境そのものへのエコクリティカルな関心が高まる今日において、パストラルを再検討する動きが出てきている。これをギフォードは「ポスト・パストラル」と呼び、パストラルはジャンルからモード、そしてコンセプトへと発展してきたと主張する。つまり、パストラルとしてみなすことのできるものは、牧夫が登場し恋愛や詩比べを行う、といったお決まりの形式から、自然と人間が調和的に暮らす理想の空間という一般的な概念へと拡張してきたのである。そこでは、自然と人間が様々な関係を結ぶ場として、田園、農村、郊外、森林、河川……といった空間が想起され、そしてそこでは必ずしも牧夫や羊は必須ではなく（別の動物が登場するかもしれない）、また内容面ももちろんより

多岐にわたるだろう。ギフォードはさらに論を進め、そうしたポスト・パストラルは、前置詞＋パストラルのうちの一形式として再定義できるのではないか、とも述べている。つまり、ポスト、ポストモダン、ポストコロニアル、ダーク、フェミニズム、クィア……などといったテーマとパストラルとの結びつきが、現代の（環境）批評においては意識されるのである。

本ワークショップでは、ギフォードの上記の論考を踏まえ、ロシアやその周囲でのパストラルの再検討を図ることを目的とした。より具体的には、以下の 2 点が挙げられる。

(1) ロシア・中東欧へのパストラル研究やエコクリティシズムの適用。ロシアにとってのパストラルとは何か？ 西洋古典に由来する「パストラル」のロシアでの受容はどのようか？

(2) （反対に）ギフォードのパストラル理論の妥当性の検討。ギフォードのパストラル論は西洋古典と、その英文学での受容を中心に進められている。ロシア・中東欧や日本の事例から、パストラルについてギフォードとは異なる視点を指摘できるだろうか？

2. 発表要旨

祝賀頌詩における牧歌的要素

菅原 彩（早稲田大学大学院・博士後期課程）

祝賀頌詩［以下頌詩］とは戴冠や君主の誕生日、戦勝等を祝い、君主を讃えて書かれる詩だが、その中に牧歌的な描写やモチーフが現れることがある。本発表では M. B. ロモノーソフや A. П. スマローコフらによる 1730-1760 年代の頌詩を取り上げてその牧歌的要素に着目しつつ、君主の治世がいかに描き出されてきたか検討した。

まず頌詩における牧歌的な風景描写は君主の治世の平和、穏やかさ、喜びの象徴として機能していることを確認した。牧歌的に描かれる君主の治世は常春の、いわば「地上の楽園」である。また頌詩ではしばしば牧歌と関わりの深い「黄金時代」のモチーフが用いられ、君主の治世が神話時代に喩えられていることに注目した。牧歌的描写やモチーフは、君主の治世の神話化に寄与していると言える。

さらに「黄金時代」としての君主の治世の表象は、メシア的君主観と結びつきうることを示した。例えば И. К. ゴレネフスキイの頌詩では、神から遣わされた天使としての君主がロシアに「黄金時代」をもたらすさまがうたわれ、君主は救済者として位置づけられている。頌詩における牧歌的要素の利用、それによる君主の治世の神話化は、君主の治世を賛美し肯定するだけでなく、メシア的な存在としての君主の位置づけを支え、それを強固なものとしていたのではないかと考えられる。

マイコフ作『魚釣り』における古典牧歌的要素

山下 大吾（京都大学・非常勤講師）

本報告では、アポロン・マイコフ作『魚釣り』（1855 年執筆）に見られる古典牧歌的要素について検討した。

本作では、自然の中で魚釣りに親しむ主人公とそれに理解を示さない街の人々という対比を通し、牧歌的文学における主要なテーマの一つである、都会的生活に対しての自然あふれる田舎、田園生活の優位またはその愛好が説かれている。また当時彼が傾倒していたスラブ派の思想とも関連し、釣りの場面や周囲の情景並びに自然が、生き生きと抒情溢れる形ながらも虚飾のない文体で描写されている。結果として、古典主義的な文体や語法に頼らず、日常見慣れたロシアの自然や風物が、いわば普段着のロシア語によってlocus amoenus「快適な場所、悦楽境」として昇華されつつ描き出され独特の詩的世界が成立している。同時に最終連では詩神への嘆願や古典の示唆を織り交ぜ、釣魚の技術という西洋古典では作品全体のテーマとしては扱われていない主題を取り上げることによって、ウェルギリウスなど古典詩人の歩んだ足跡にも連なろうという意図も看取される。ロシア語やロシア的主題を通して古典的伝統の再現を目指した作品とも捉えられるであろう。

ドストエフスキー作品における黄金時代の夢とシラー的牧歌

齋須 直人（名古屋外国語大学・講師）

シラーの評論『素朴文学と情感文学について』で論じられる牧歌や黄金時代は、ドストエフスキーのいくつかの作品に登場する、古代ギリシアの群島をイメージした「黄金時代の夢」と呼ばれる牧歌的な場面の創造に重要な役割を果たしている。報告では、ドストエフスキーの理解における、文明の歴史の３つの発展段階「族長主義」（過去）、「文明」（現在）、「キリスト教」（未来）が、シラーのこの評論に見られる文明観とも対応すること、ただし、ドストエフスキーにおいてはキリスト教が、シラーにおいては美が未来の理想状態の実現のために重視されていることについて論じた。さらに、ドストエフスキーの短編『滑稽な男の夢』を取り上げ、この作家における文明の歴史の３つの発展段階の見方がこの作品にも反映されていることを示した。この作品に登場する「黄金時代の夢」のイメージは、人類が回帰することが不可能となった理想の調和状態である「族長主義」の時代と対応しており、主人公はそれが失われてしまったことを嘆くとともに、未来における新たな理想状態である「キリ

スト教」の時代を実現することを志向する。

移動派絵画における農村とパストラル

井伊 裕子（東京外国語大学大学院・博士後期課程）

発表においては、ヴェネツィアノフの牧歌的な田園風景を起点に、1870 年代から 1880 年代初頭の移動派の作品における農村風景描写を分析した。

アレクセイ・ヴェネツィアノフはロシアの自然と農民を本格的に絵画化した最初期の画家だが、農民のみにフォーカスするのではなく自然豊かな田園風景とともに描くことで牧歌的な農村を生み出し、ロシア農村表象に理想郷的イメージを付与した。しかし再び自国の農村風景にスポットライトが当たった 186070 年代において、写実主義の文脈のなかで農民像は社会批判、政治的文脈に回収され、一方田園風景は画中から農民を消去することで絵画的な美しい風景を確立する。

自国の農村風景や自然へのナショナリスティックな視線はヴェネツィアノフ以降通底しているものの、1870 年代において農民像は理想郷から離れ一定の理想化を免れていた。

しかしながら 1870 年代後半から 80 年代にかけて移動展覧会が大衆化していくと、発足時の厳しい社会批判的態度は薄れ、70 年代に活躍した風俗画家たちですら美しい田園風景を描出するようになる。またクズネツォフ《祭りの日》に代表されるように、移動派が蓄積した「ロシア的」な自然描写を用いつつも農民の理想化がなされた、牧歌的で平穏な農村風景が登場する。つまり客体化された農民は再びヴェネツィアノフと同様の美しい田園風景へと吸収されたといえる。

ジョージア文学の「パストラル」

五月女 颯（日本学術振興会・特別研究員）

本発表では、18–19 世紀のジョージア人詩人 3 名の作品を取り上げ、そこに表されるパストラル表象の変遷を概観することで、ギフォードのパストラル論を、ロシア帝国の周縁としてのジョージアの観点から検討した。

第一に、ロシアやウクライナに渡り活躍した詩人グラミシヴィリ（1705–1792）の詩集『ダヴィティアニ』に描かれる「パストラル」を取り上げた。そこでは、同時代のロシアやウクライナの文学の影響を色濃く受け、羊飼いの恋愛模様など典型的なパストラル表象を確認できる。第二に、カズベギ（1848–1893）の『ぼくが羊飼いだった頃の話』(1882）を扱った。その表題が想起させる牧歌的風景とは裏腹に、羊飼いの困難な生活が綴られている。

なかでも注目すべきは、ロシアの帝国主義的支配の尖兵とも言うべきコサックが羊飼いの移動・行動を様々に妨害していることであり、ここではギフォードの唱える「アンチ・パストラル」が、帝国主義的条件のもとにその困難さを増していると言える。

結論に代えて、チャヴチャヴァゼ（1837–1907）の詩『隠遁者』(1883）を参照した。この詩は、隠遁生活を送っていた男の元に女性の羊飼いが現れ心を乱される、という内容である。カズベギの作品で羊飼いが重労働やコサックとの不断の諍いを伴う男性的な職業として提示されるとするならば、対極的に羊飼いが理想化される際には、そのようなジェンダー的な分化を見せるのかもしれない。

不可能としての牧歌
ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』を中心に

須藤 輝彦（日本学術振興会・特別研究員）

ミラン・クンデラのフィクション作品にエコクリティシズム的な観点からアプローチする研究は、まだほとんどなされていない。だがクンデラの『存在の耐えられない軽さ』、とりわけその第 7 部「カレーニンの微笑」には、これと強く呼応するものがある。

そこではまず主人公テレザが雌牛や愛犬カレーニンに向ける眼差しを通して、自然をもっぱら支配の対象とする近代的「人間」に対する批判が加えられるが、おもに旧約聖書に依拠して非–人間の特性として語られる「牧歌」は同時に反復の肯定でもあり、その意味で大文字の〈歴史〉、進歩に基づく直線的な歴史観に対立するものとして措定されている。本発表ではこの「〈歴史〉の否定としての牧歌」を、J. クロウトヴォルや M. エリアーデを参照しながらみずからを〈歴史〉の客体であるとする中東欧的歴史観に引きつけて解釈し、最後に「カレーニンの微笑」がその形式と内容双方を通じて体現している牧歌の不可能性について論じた。

日本近代におけるパストラルについて
佐藤春夫「田園の憂鬱」を題材に

伊東 弘樹（早稲田大学大学院・博士後期課程）

本発表では日本近代におけるパストラル受容について、明治から大正期に流行した〈田園〉表象から考察し、ロシアにおけるパストラルの相対化を目指した。

まず、先行論において、その受容の発端とされる国木田独歩『武蔵野』（1901）が、日露

戦争後の人口拡大と都市域の外延化に伴う「田園趣味」の流行によって、刊行数を伸ばしていたことを指摘し、当時の〈田園〉表象の歴史的な流れをまとめた。

続いて、佐藤春夫『田園の憂鬱』(1919) が、作者自身の神奈川県都筑郡中里村での 7 ヶ月間の生活を下敷きに、「隠遁者の文学」や「田園風景」を描こうとしていた背景を明らかにしつつ、作品分析へと進んだ。

作品内の「彼」が望もうとしていたのは、理想的かつ現実的な〈田園〉であり、むしろ「自然」をそのように見てしまう「人工性」それ自体であったことから、『田園の憂鬱』は同時代の〈田園〉≒〈パストラル〉への欲望や眼差しを相対化しようとした主人公が、その力学に取り込まれ自己を解体化する物語である、と結論づけた。

最後に、農学分野を中心に「田園回帰」という考え方が広まり、現内閣では「デジタル田園都市国家構想」を進めている事例を挙げ、〈田園〉表象がアクチュアルな問題であることを示し、結びとした。

3. 全体討議

討議 ① コメンテーター：小椋 彩（北海道大学・助教）

〈コメント〉

英米文学を中心に発展してきたエコクリティシズムには地域的偏差が存在し、ロシア・中東欧文学の分野における研究の蓄積は十分ではない。本ワークショップは 18–19 世紀の文学を、日本を含めた形でエコクリティシズムというテーマから扱ったものとして、画期的である。

パストラルは古典的ジャンルだが、それをエコクリティシズムの現代的問題、すなわち人間中心主義に関連する諸問題と、どう結びつけるかが問われているだろう。田舎と都市の対比において、パストラルが田舎の理想化を意味するものだとすれば、近代化の遅れたロシアのパストラルは西欧とは異なるのではないか。エコクリティシズムが本来的に土地・場所と結びつくものであることを考えれば、ロシア・中東欧について検討するのは意義あることだろう。

本ワークショップのテーマに関連して、ポーランドの研究者アンナ・バルチュは、ポーランドのエコクリティシズムが遅れていた理由について、ポーランドのロマン主義の特殊性を挙げている。ポーランド・ロマン主義では、自然に国家の義務への従順さという役割を担わせ、すなわち自然はポーランドのアイデンティティとして描かれるのである。

〈質疑応答〉

Q. ドストエフスキー作品において、大人に対してか弱い子供と、人間に対してか弱い自然、という構図は相互に結びつくだろうか？

A. 子供と自然は結びつかないのではないか。（齋須）

Q. ジョージアのパストラル文学はあるか？労働者の文学として羊飼いの文学を読めるか？
A. 羊飼いが労働者であるのはその通りである。羊飼いそのものを描くものではないが、農村を舞台にしたチャヴチャヴァゼの小説もある。農民の青年が貴族の女性に叶わぬ恋をするというプロットであり、そこで青年は農作業中に作業死している。（五月女）

Q. クンデラの女性の描き方について。牝牛に寄生して生きる人間という表現があるが、牝牛を牡牛に置き換えられないか？
A. 置き換えられないのではないか。クンデラ作品ではクィアな主体が描かれない。クンデラ作品でもっともクィアな主体（と言えるならば）は、雌なのにカレーニンと名付けられた犬だろう。『クンデラとフェミニズム』という書籍もあり、そこでは、クンデラは「問題のある女性」を描いていると評されている。また、クンデラは反出生主義に取り組んでいもいることは指摘できる。（須藤）

Q. 海外文学の翻訳の影響は？ 特にノーベル賞作家ヴワディスワフ・レイモントの翻訳の影響は？
A. 当時のエスペラント語の受容という形が一つあるだろう（代表として宮澤賢治）。だが、佐藤春夫はあまり影響を受けていないのではないか。また、田山花袋は影響を受けているかもしれない。（伊東）

討議 ②　コメンテーター：中村唯史（京都大学・教授）
〈コメント〉
　パストラルは無時間性、永遠性、不変性の表象だと考えられるだろう。須藤発表での言葉を用いれば、「歴史 vs.牧歌」と言える。では、ロシア・東欧ではパストラルがそうした美的な表象に収斂したかと言えば、そういったことは必ずしもない。近代化（＝西洋近代の輸入・変換）の後発地域たるロシア・東欧では、脱時間的なパストラルが、近代化への違和感の表明として使われたのではないか。西洋古典や英文学に基づいて論じたギフォードは、パストラルを不変・永遠なものとしてみなすことができたが、ロシア・東欧ではそうした社会的な条件が加わり、ナショナルなものを表す空間となったのではないだろうか。柳田國男も『遠野物語』の序文で、近代化を進める平地人へのアンチテーゼを示しており、その点に意識的であった。
　また、外部からの来訪者こそがパストラルを見出すのであり、その地に住む生活者ではない。都会人がパストラルを求めていくと、複雑な人間関係や共同体の縛りがあることに気が

つくのである。田舎にパストラルを求めること自体、都会中心的である。

〈質疑応答〉
Q. パストラルが現代でどのように復興するか／すべきか、またそれはどのようなものであるべきか？ ナショナリスティックなパストラルを、現代においてどう捉えるべきなのか？中心／周縁の再構築になりはしないか？

A. パストラルは本質的に「ないものねだりの形式」であり、自身の生活や社会への不満を抱くときに向かう先がパストラルなのではないか。ナショナリズムはまた民族の理想を過去の「黄金時代」に求めるため、そうした点でパストラルと相性がいいのだろう。エコクリティシズムの枠組みのみならず、ナショナリズムに対して批判的なポストコロニアリズムなどを参照しつつ考える必要がある。（五月女）

今回のワークショップで誰を取り上げるか悩んだ。国木田独歩を挙げるとすれば、都会と農村の「結婚」という焦点の当て方になってしまう。そうではなく、今日に至るまで、なぜ田園のイメージを使わなくてはならないのか、その心情はどういったものなのかを考えるべきだろう——復興そのものというよりは、復興に追われる人間とはいったい何なのだろうか。（伊東）

ロシア絵画においてもパストラルはナショナルな動きであったが、「自国の風景」として描かれた地域は範囲が広い（コーカサス、ウクライナ、ステップなど）。現代のロシアで移動派が描いたようなパストラルな風景を「復興」させるのは問題があるだろう。（井伊）